

『色づく畑を刈り入れよう』

目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。

ヨハネの福音書 4章 35節

主の年2023年、明けましておめでとうございます。今年、いのちの泉聖書教会はヨハネの福音書4章35節【目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。】との御言葉を年間聖句に据えて、「色づく畑を刈り入れよう」という教会標語を基に歩んで参りたいと示されており、この御言葉はイエス・キリストご自身が語られた御言葉です。希望に溢れる御言葉です。私たちの信仰が表される御言葉です。私たちは一年間この主イエスのことばに期待し、信頼し、そして“人々の救い”という豊かな実を刈り入れるのです。

◆目を上げて畑を見なさい ～主への信頼と期待～

少し遡ります。イエス様がサマリアの女性と会うために待っていたのはヤコブの井戸の傍らでありました。v6では「イエスは旅の疲れから、その井戸の傍らに座っておられた」と記されており、わざわざ「時はおよそ第六の時(正午頃であった)」と記されています。そこに人目を避けて、一番暑い時間に水を汲みにサマリアの女性がやって来るのですが、v8には【弟子たちは食物を買いに、町へ出かけていた】と記されていました。おそらく弟子たちは昼食調達のため、町の中へ出かけていったわけです。

イエスとサマリアの女性との会話も佳境を迎えた頃、食料調達を終えた弟子たちは井戸のところへ戻って来ます。帰ってきた弟子たちは、イエス様がサマリアの女性と会話をしている光景を見て驚いた(不思議に思った)のは当然です。なぜなら、ユダヤ人はサマリア人を異邦人とみなして避けていたからです。先生(ラビ)と呼ばれる指導者たる者が公然と女性会話を交わすなど、当時の常識では考えられなかった時代です。ですから弟子たちが、イエスと女性が会話している光景を見て驚いたのは当然なのに、にも関わらず、彼らはイエスに何も尋ねなかった。まるで何もなかったかのように、調達してきた食料を「食べてください」とイエスに勧めています。まるで、彼ら弟子たちの求霊に対する無関心さがここに露呈されているかのようです。専ら彼らの関心は先生に食事を用意することであったのでしょう。

先生の食事について一番興味を抱いていたであろう彼らにイエスは言われます。【v32-34 わたしには、あなたがたが知らない食べ物があります。～わたしの食べ物とは、わたしを遣わされた方のみこころを行い、そのわざを成し遂げることです。】弟子たちにはイエスが語っていることが分かりません。イエス様の食物、成し遂げるべきそのわざ、使命とは何でしょうか？それは十字架の贖いです。罪人を永遠のいのちへと導くことです。しかし弟子たちには未だ分からなかった。気付けなかった。彼らの関心は食物で腹を満たすことであった。そんな弟子たちにイエスは言われました。【v35 あなたがたは、『まだ四か月あって、それから刈り入れだ』と言ってはいませんか。しかし、あなたがたに言います。目を上げて畑を見なさい。】イエスが成し遂げようとする救いのわざに注目すべきであり、関心をそこに向けるべきであることが教えられます。通常では刈り入れの季節でなくとも、目の前にある畑は既に色づいており、刈り入れ時を迎えていると教えられています。だからこそ「目を上げて畑を見なさい」「今こそ、常に収穫を期待しなさい」とイエス様は教えてくださっています。今年2023年、私たちは主に期待して、目を上げて畑を見ようではありませんか。

◆畑は色づいている ～宣教は主のわざ～

「畑はもう色づいているよ。刈り入れるだけだよ」。もう既に畑は色づいているとイエス

様が仰っていることは大変重要です。ここで興味深いことは“蒔く者”と“刈る者”は違うのであり、自分で蒔いて刈り取るのではなく、他の人が蒔いて自分が刈り入れると教えられていることです。「一人が種を蒔き、他の者が刈り入れる」。刈り入れて収穫する者とは弟子たち、私たちのことです。では“蒔く者”とは誰でしょうか？それは主なる神様です。イエス様は「わたしの食べ物とは、わたしを遣わされた方のみこころを行い、そのわざを成し遂げることで」と言われました。すなわち、イエス様が十字架による贖いの一粒の麦として地に蒔かれることこそが主なる神様の御心です。蒔く者は主なる神様であり、イエス様ご自身が一粒の麦となって地に落ちたとき、そこには豊かな実り、収穫があるのです。

イエス様は、ユダヤ・エルサレムの人々からは異教・異邦人・罪人の町とされていたサマリア地方の人々に生けるいのちの水が溢れるようにとサマリアに來られました。イエスと出会ったことでサマリアの女性は罪から解放され、真の礼拝者へと変えられました。これまで人目を避けて生きてきた彼女は町の中へ入って行き、サマリアの人々にイエス様について伝えたのです。すると町中の人々はイエスの話しを聞こうと今、イエスの元に集まろうとしているのです。弟子たちが食料調達に注意を向けている間に、宣教の主である神ご自身がサマリアという畑に種を蒔き、耕し、実りを与えてくださっていたのです。イエス様の目には集まろうとしているサマリアの人々が映っていたことでしょうか。それゆえ畑は「色づいて、刈り入れるばかりになっています」と仰られたのです。

宣教は主のものであります。私たちの努力、忍耐によって成し遂げられるものではありません。イエス様は言われました。「畑は色づいています」と。宣教は主のわざであることを胸に刻みましょう。イエス様が十字架による贖いの一粒の麦として、この地に蒔かれているのです。日を照らし水を与える神がおられることを私たちは信じるのです。主なる神様は今も生きて働いておられ、畑を色づかせてくださる宣教の主なのですから。

◆刈り入れるばかりです ～喜びの証し～

主の御言葉に期待して目を上げて畑を見るとき、その畑は既に色づいています。宣教の主の御わざが表されているのです。あとは刈り入れ、収穫を待つばかりです。イエスは語られました。「さあ、刈り入れるばかりになっています」と。福音宣教という主のわざに弟子たち、そして私たちも刈り入れをする者として参与できるのです。主なる神様は何の力も取り得もないかも知れない小さな私たちをも用いて、その宣教のわざを成し遂げようとしておられます。刈り入れる者は畑に出て行き、豊かに実った“人々の救い”という実りを喜びながら収穫するのです。私たちは主イエス・キリストによる救いの喜びを証ししながら、人々の救いという実りを刈り入れるのです。これが私たち、刈り入れる者に託された使命です。強いられてではなく、無理やりでもなく、私たちの内で泉となった永遠のいのちの水が湧き出るように、家族、友人、この町の人々に流れ出て行くのです。それはサマリアの女性が【自分の水がめを置いたまま町へ行き、「来て、見てください。私がしたことを、すべて私に話した人がいます。もしかすると、この方がキリストなのではないでしょうか。】と喜んで証したようにです。彼女は、主イエスが自分に与えて下さった救いという実りを刈り入れるばかりか、サマリアの町の人々の救いという実りも刈り入れることとなります。収穫の喜びに預かったのです。彼女の証しを聞いたサマリアの町の人々もイエスから話しを聞きたいと願い、続々とイエスの元へと集まってきました。そして【さらに多くの人々が、イエスのことばによって信じた。彼らはその女に言った。「もう私たちは、あなたが話したことによって信じているではありません。自分で聞いて、この方が本当に世の救い主だと分かったのです。】と。サマリアの女性はこの町の人々の救いを喜んだことでしょうか。イエス様と共に刈り入れの祝福を喜んだことでしょうか。私たちもまた宣教の主である神と共に、刈り入れ、収穫の喜びを味わうのです。

主の年2023年、私たちは『色づく畑を刈り入れる教会』として歩んでまいりましょう。今こそ、常に、収穫を信じて期待して「目を上げて畑を見たい」と思います。私たちの家族、友人、職場、コミュニティー、袖ヶ浦の町が私たちの見るべき畑です。祈りの手帳を更新して、目を上げて畑を見て祈り合ってまいりましょう。私たちが目を上げてみると、畑は既に色づいています。イエス様が十字架による贖いの一粒の麦として、この地に蒔かれているのです。主なる神様は今も生きて働いておられ、畑を色づかせてくださっています。宣教は主のわざなのです。私たちは刈り入れる者として収穫の喜びを主なる神と共に喜びたいと願います。私たちの内で泉となった永遠のいのちの水が湧き出るように、家族、友人、この町の人々に流れ出て行くのです。それは私たちの喜びの証しです。この町の人々の救いの実を刈り入れるために、私たちの教会は開かれた教会であることを目指してまいりましょう。救いの喜びを証ししながら収穫の祝福に預かるのです。人々の救いを、主なる神様と、そして皆さんと共に喜ぶことが出来る一年となれば何と幸いでしょうか。